

## 第4章

# 成果と課題

## 第4章 成果と課題

3年次計画の最終年度である今年度、「自ら考える力」の基礎となる「確かな学力の育成」に向けて、視点毎に理論研修・検証のまとめなどを通しての成果と課題は以下の通りである。

視点1 『「基礎的・基本的な知識や技能を習得及び活用する学習活動」と「これまでに培われてきた力を発揮して問題解決に取り組む探究的な学習活動」を効果的に盛り込んだ単元構成の工夫改善』

### 《成果》

- ・新学習指導要領の主旨に基づく学習観である「習得」「活用」「探究」の捉え方について研究委員の中で議論を重ねる事で、後志教育研修センターとしての押さえが明確になった。
- ・教師が単元を通して身につけさせたい力を明確にすることにより、「習得」「活用」「探究」を盛り込んだ学習活動が構築されていくことがわかった。
- ・「習得」「活用」「探究」を考え意図的な単元計画を構成することは、「子どもの思考判断・表現力を高める手段である」ことが明確になった。
- ・「習得」「活用」「探究」を考え意図的な単元計画を構成することは、教師の狙いが高まると共に、子ども達の課題意識も高まり言語活動の充実に繋がることがわかった。
- ・単元との出会いの場の工夫が大切であることが検証された。
  - ◇これまでの生活体験を掘り起こすようなもの
  - ◇体験活動から実感を伴うもの

### 《課題》

- ・「習得」「活用」「探究」の捉え方は、授業実践などを通していく中でまだ変化していく状況なので、継続的な理論研修が必要である。
- ・探究的な学習活動の実践が出来なかった。

視点2 『問題解決的な学習を基盤とし、「課題意識（問題意識）」を持ちながら、解決に向けた「自分なりの考え」をもとに「仲間と共に学び合う場」を意図的に設定した学習過程とその指導の在り方の工夫改善』

#### 《成果》

- ・視点2を主に「1単位時間（1ユニット）での工夫について」とし、1単位時間を3段階に分けて考えることで、段階ごとに子どもの学習活動に応じた教師の意図を明確にした支援のあり方に迫ることができた。
  - ・「課題（問題）意識を持つ」段階では、授業導入時に「身近な素材や事象」「体験活動やゲーム」などを取り入れることによって、子どもに「必要感や切実感」を生み、「なぜだろう、やってみたい」と思わせ、子どもが自ら学習活動に意欲を持って主体的に取り組めるようになることがわかった。
  - ・「自分なりの考え持つ」段階では、教師が既習事項を把握してしっかりと予測しておくことで、一人ひとりの子どもへ手立てが可能となることがわかった。また、既習事項を活用して解決しようとする子が増えることでより子どもがより「主体的な姿勢」と共に「学び方そのもの」が身につくことがわかった。
- 「交流を通して考えを深める」段階として2点
- ・小集団交流を自力解決の一つと位置づけ、ある一定の解決を子どもに委ねることで、子ども同士で素朴な疑問が解決されたり、考え方が整理されたり、新たな解決の視点が生まれたりすることがわかった。
- 反面、小集団交流はあくまでも意図的に行い、指導案でも教師のかかわりの中で子どもの動きや思考を予測し、個々への支援に当たれるように狙いを明確にして明記することが重要であることもわかった。
- ・全体交流を教師と多くの子どもたちによる練り合いよりよい解決へ高めること位置づけた。そこでは、教師の意図的な働きかけの下、子どもたちに「何を話し合わせるか」ということ明確にすること、焦点化された課題を設定することで、子どもたちの思考を揺さぶり、思考の深まりを期待できることがわかった。

#### 《課題》

- ・教科の特性をより明確にした「1単位時間のモデル」はどうあるべきかを考える必要がある。
- ・1単位時間内での「習得」「活用」の明確な位置づけについての更なる研究が必要である。
- ・子どもの見取りやふりかえりを生かした学習展開のあり方

視点3『単元を通した意図的・計画的な評価を次の指導に活かしていくための工夫改善』

#### 《成果》

- ・視点1との関わりでは評価計画を作成することにより「習得・活用・探究」のバランスを確認することが出来た。
- ・視点2との関わりでは座席表の活用により小集団交流での見取りを全体交流で役立てることができ、評価にも役立てることができた。

#### 《課題》

- ・評価情報をどのように生かし、その結果がどのように高まったのか、研修が必要。
- ・「評価は次の指導に活かすためのもの」との共通理解にたつことができたので、教師の見取りと子どもの振り返りを次の指導に活かすための具体的な手立てを明らかにするにはどうしたらよいか検証する必要がある。

#### 《次年度の方向性》

以上の今年度の成果と課題を受け、新研究立ち上げの年度である次年度を迎えるに当たり方向性を話し合った。

- ・学習指導の実践検証は各学校でも行っていることなので、後志研修センターとしては教員研修のあり方、工夫などを行った方がよいのではないか。
- ・今回の3年計画は最終年度に研究大会があったので実践検証が出来なかった。許されるならば次年度は研究主題をそのままにしながら検証授業を行い、その中で新しい研究主題を1年かけて練ってはどうか。
- ・今回新学習指導要領の移行に伴い、先駆け的に研究や実践を行うことで自分たち自身が勉強になった。また、それを何らかの形で各職場などで還元できたと思う。次年度も、今回の研究を土台にして引き続き検証授業を行いながら研究主題の調査研究を行って行くのがよい。